

# 平成21年度 初任者研修 他校体験研修

## 教務主任説明

### < 学校関係資料 >

- ・ 学校要覧
- ・ 学校案内

### < プリント資料、「指導と評価」からのコピー >

- ・ 学習意欲のとらえ方・育て方 (筑波大学教授 櫻井茂男、2004年4～9月号)
- ・ 子どもの発達を理解する (筑波大学教授 櫻井茂男、2007年9月号)
- ・ 子どもとかかわる力を磨く (東京都足立区立蒲原中学校教諭 鹿島真弓、同上)
- ・ 魅力ある学級をつくる担任 (北海商科大学教授 大友秀人 同2009年9月号)
- ・ テスト問題の作り方 (英語) (関西大学助教授 静 哲人)

### 協同的な学び

週末、岩波ブックレット数冊を読みました。その中に、「習熟度別指導の何が問題か」佐藤学著 (ISBN4-00-009312-6、税別480円) がありました。佐藤氏の著作は、以前『学校の挑戦 学びの共同体を造る』(小学館、ISBN4-09-837370-x) を読んでいたので、タイトルの“協同的な学び”という概念は理解しているつもりです。そして、私自身の授業で、少人数グループによる調べ学習などを導入しながら、佐藤氏の説く“協同的な学び”に近い状況をつくろうと努力している。

本書によると、習熟度別指導がこれほど普及した背景には、新しい能力主義と競争主義のイデオロギーがあるという。この「新しい」能力主義と競争主義は、従来からの日本の教育を「悪平等」と決めつけ、戦後教育においてタブーにされてきた能力による差別や排除や競争を肯定し、民主主義と平等を真向から否定していることにあると述べている。

PISAショックにより、思考力や読解力の向上が叫ばれていますが、そこで着目されたフィンランドでは能力や進路の差によってコースを振り分ける教育(トラッキングという)は行っていないし、高いレベルの生徒が多いだけでなく、学力格差の幅が狭いという特徴があるという。

トラッキングには5つのタイプがあるという。

- 1 学校の種別化によるトラッキング
- 2 学校の中に多様なコースを設けるトラッキング
- 3 ストリーミングによるトラッキング
- 4 習熟度別(能力別)指導のトラッキング
- 5 学校選択によるトラッキング

少なくとも数年前までは小学校と中学校においてトラッキングはほとんどみられなかったが、近年爆発的に4のトラッキングが普及しているという。ちなみに、高校については、以下のように記述されている。

高校はコースと類別の多様化と入学試験による「輪切り」の序列化によって、第1、第2、第5のトラッキングが強く作動するシステムでした。

学びとは新しい世界との出会いと対話であり、教師や仲間との対話と自分自身との対話をおして「背伸びとジャンプ」に挑戦する営みだという。すべての子供が「背伸びとジャンプ」としての学びを遂行する授業を行うには、教科書よりもやや高いレベルの内容を設定し、同時にわからないこの疑問やつまずきを積極的に取り上げる必要がある、この大きなギャップを教師と子供たちが協同で埋めていくのが授業であると述べている。

教科「農業」で習熟度を行っている学校はないと思うが、私たちが取り組む農業の授業では、上のようなことをやっている先生は多いのではないかと。前回の指導要領の改訂で出てきた、総合的な学習の時間などは、まさしくプロジェクト学習で解決できるような気がするのだが、ちょっと乱暴な意見だろうか？

「生徒の勉強ができない→内容を簡単にする→ますますできなくなる」という悪循環はないだろうか？

中退者の第1の理由は「授業がやさしすぎる」ことであり、第2の理由は「話を聞いてくれる先生がいない」ことだとどこかで聞いたことがあるが、みなさんはどう考えますか？  
授業は分かりやすいことは大切だと思いますが、単に簡単にするだけでは生徒の知的欲求を刺激できないのではないのでしょうか？